



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	COLT Part Bによる観察方法とその問題点
Author(s)	河合, 靖; 酒井, 優子; 横山, 吉樹 他
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 53, 99-113
Issue Date	2007-12-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34562
Type	departmental bulletin paper
File Information	KAWAI.pdf



COLT Part B による観察方法とその問題点

河 合 靖・酒 井 優 子・横 山 吉 樹
石 塚 博 規・青 木 千加子

1. はじめに

本論文は、授業観察法である COLT (Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme) Part B を用いて、英語授業を分析する指針を与えるものであり、それによって、COLT の普及に貢献することを目指している。

授業観察方法を統一し、それを用いて授業を観察し、分析するのは重要なことである。言語教育には、COLT という世界中で広く用いられている観察方法があるが、他の教科には、これほど詳細にわたり、且つ、広く用いられているものはない。日本の英語教育では、授業観察のための簡便な記入表などが教育実習や研修のために用いられていたが、近年 COLT を用いた研究が報告されてきている。しかしながら、その多くは、Part A を用いた研究であり、Part B を用いたもの (Evans, 2001; 青木・石塚・横山・酒井・河合、投稿準備中) は少ない。その理由は、一つには、テープから書き起こした発話をコーディングし集計するという作業に、多くの労力が必要であるからである。もう一つは、発話をコーディングするには、そのための知識と経験が必要となるためである。前者は避けては通れないものであるが、後者については、その方法を啓蒙することによって十分対処でき、それによって普及に役立つはずである。また、COLT Part B には、コーディングや集計の方法に関していくつかの問題点があり、それについても本論で論じていく。

2. 授業分析法の発達と COLT を用いた研究

コミュニケーションに着目した授業分析は1960年代から行われており、教室内的教師の行動を記録して学習の成果との関係を調べるために、教師や学習者の発話を記号化して記録するシステムが開発された。中でも1970年代に広く普及した方法に Flanders (cited in Allwright & Bailey, 1991) による相互作用分析 (Flanders' Interaction Analysis Categories: FIAC) がある。この授業分析法により、教師と学習者の発言・行動を基に授業の特徴が数量的に分析された (加藤, 1977)。

FIAC は、当初外国語教育以外の科目で、教室内のインタラクションの分析（Interaction Process Analysis）のために用いられたが、外国語教育においても効果のある教え方への興味が高まり、その手法を適用した数々の改良案が開発されてきた。1980年代に入って、外国語教授法にコミュニケーション中心の教育観が広まると、授業観察システムもそれを反映したものが開発されるようになった。そうした授業分析法の集大成とも言うべき総合的な授業分析が COLT である（藤森，1990）。この観察法は、第二言語の授業を体系的に観察・分析し、それによりコミュニケーションへの指向性などの学習過程を測定する目的でカナダの Spada らによって開発された。そこで用いられている分析カテゴリーは、Flanders の FIAC に比較して数が増加し、はるかに複雑になっている。

COLT は、Part A、Part B 2つのパートから成る。Part A を使用した研究、Part B を使用した研究、Part A、Part B を組み合わせて使用した研究の順に見ていく。

Part A では教室での言語活動と指導過程をリアルタイムで観察・記録できる。教室での活動を参加形態、活動内容、教材などのいくつかのカテゴリー別に計測することにより、指導と学習効果などを測定できる。指導過程と学習内容をリアルタイムで記録することにより、言語活動と指導過程を明らかにすることができ、分析方法も比較的容易なことから、近年では Part A を用いた研究が多く報告されている（Terdal, Dunn, & Gaynor 1997; Taguchi, 2005; 安野・堀田・浜中・酒井，2004; 石塚・横山・平田・青木・伊東・河合・他，2005）。

COLT 開発者の一人である Spada (1987) は、COLT Part A を用い、カナダの大学の ESL プログラムにおいて、指導内容の違いがどのように学習効果に影響を及ぼすかを、量的・質的データにより分析し、相互の関係を明らかにした。量的データでは、言語形式重視のクラスでは文法テストの結果が良かった。質的な分析から、オーセンティックな教材が使われ、学習者の興味を引き出す工夫がなされたクラスでは、リスニングテストの結果が良いことがわかった。

COLT Part B では教師と学習者、または学習者と学習者との実際の発話をいくつかのカテゴリーに分類し分析を行うことにより内容や質を測定する。このため、授業全体のコミュニケーションへの指向性なども COLT Part A より正確に示すことができ、より詳しい授業の特徴を明らかにすることが可能である。

Evans (2001) は複数の外国人教師と日本人教師の教室での発話の違いを COLT Part B を用いて検証した。日本人教師は目標言語である英語を外国人教師に比べ少なく使用していたものの、学習者に発話を引き出す質問をしていた。外国人教師と日本人教師の言語使用の差は見られた。しかし、学習者の発話には差が見られず、外国人教師・日本人教師の違いに関わらず同様の意味交渉を行っていた。しかし、COLT Part B では教師と学習者、または学習者と学習者との発話を個々に記録・分析することができるが、その流れを把握することができず、他の手法と組み合わせることを提案している。

青木・他（投稿準備中）は、A大学においてコミュニケーションを目的とする英語プログラ

ムが実際にどのように運営されているか、また、そのプログラムの目標をどの程度実現しているかについて、COLT Part B と Sequential Analysis (e. g., Markee, 2000) を併用し、観察・分析を行った。その結果、A大学の複数の教師間の授業方法の違いが、発話の機能分析だけではなく、発話がどう展開していくかなど、より詳細にコミュニケーションの指向性を測定することができた。

浅岡 (2003) は、COLT Part A と COLT Part B を組み合わせた手法により、オーストラリアの初等・中等教育で日本語を教えているオーストラリア人教師 (AJT) と日本人教師 (NJT) の指導法の違いを分析した。AJT は NJT に比べ L 1 の使用が多いものの、話すための活動時間が多かった。NJT は L 2 の使用は多いが、書く活動時間が多く、NJT は全員、大学までの教育は日本で受けており、日本の学校の授業、特に英語の授業の仕方をオーストラリアの学校での日本語の授業にあてはめている傾向が見られた。

Yu (2006) は、台湾の大学の英語クラスにおいて、複数の非母国語話者の英語教師が、どの程度社会言語能力の育成に注意を払った授業を行っているかを、COLT Part A と Part B を組み合わせた手法により分析した。その結果、授業中には社会言語的活動はほとんど見られず、また、教師は学生の不適切な言語使用の訂正はしていたが、学生が積極的に目標言語の中に適切な言語使用を促す手助けは行っていなかった。分析結果から、Yu は英語教師の社会言語能力指導の重要性を指摘している。

Gaynor, Dunn, & Terdal (1997) によると、COLT は Part A, B ともに指導過程と学習内容を観察・記録する手法として組織的体系的に構築されており、研究結果からもその妥当性があるとしている。また、コード化の訓練を行うことにより分析者間での統一が図られ、信頼性が高まるとしている。

以上の先行研究からも COLT はコミュニケーションを指向した英語プログラムの授業分析としては Part A, B ともに有効なツールであると考えられるが、改善が望まれる点も存在する。本論では、特に Part B に焦点をあてて、コーディングや集計の方法を説明し、その問題点を議論する。

3. COLT Part B の観察カテゴリーとコーディング

COLT Part B は、教師と学習者、学習者と学習者の間の言葉のやり取りを分析し、そこに見られるコミュニケーションの指向性の度合いを分析するものである。以下、Spada & Fröhlich (1995) を基に、COLT Part B による授業観察のカテゴリーと分析方法を説明するとともに、観察分析対象、観察方法について述べる。

3.1 COLT Part B について

観察カテゴリーは、1) Off task (非授業活動)、2) Use of target language (使用言語)、3) Information gap (情報格差)、4) Sustained speech (発話量) 5) Reaction to form or message (形式／内容への応答)、6) Incorporation of student/teacher utterances (学習者／教師の発話摂取)、7) Discourse initiation (談話主導) 8) Form restriction (形式制限) に分かれ、1)、7) 以外のカテゴリーはさらにいくつかのサブカテゴリー・項目に分かれている。以下、付録に基づき、それぞれのカテゴリーについて説明する。() 内の番号は付録の項目番号である。

1) Off task (非授業活動) (1)

教師用の観察カテゴリーで、例えば、教師による父母会の案内など、正規のカリキュラムに関係の無い活動である。

2) Use of target language (使用言語) (2、3、20、21)

L 1 (母語) による発話か、L 2 (第2言語) による発話かを区分するカテゴリーである。

3) Information gap (情報格差) (4～7、22～25)

情報が予想可能なものであるかどうかを明らかにするための観察カテゴリーである。2つのサブカテゴリーから成り、Giving information (情報提供) はさらに Predictable (予想可能情報) と Unpredictable (予想不可能情報) の項目に区分され、Requesting information (情報要求) はさらに Pseudo request (擬似要求) と Genuine request (真正要求) に区分される。例えば、教師が「今日の天気は？」と尋ね、学習者が「晴れです。」と応えるのは、Pseudo request のあとの Predictable information の提供となる。

4) Sustained speech (発話量) (8、9、26～28)

発話の長さを Ultraminimal (1、2語)、Minimal (3語以上の句、節、文)、Sustained (3以上の節) に区分するカテゴリーである。なお、Ultraminimal は学習者の発話のみを対象とする項目である。

5) Reaction to form or message (形式／内容への応答) (10、11、32、33)

発話に対する応答がその言語形式 (文法、語彙、発音) に対するものか、意味や内容に対するものなのかを区分するカテゴリーである。

6) Incorporation of student/teacher utterances (学習者／教師の発話摂取) (12～18、34～40)

教師と学習者が互いの発話に対して行う様々な応答を区分するためのカテゴリーである。Correction (訂正)、Repetition (反復)、Paraphrase (換言)、Comment (論評)、Expansion (拡張)、Clarification request (明確化要求)、Elaboration request (精緻化要求) の7つの項目に区分する。Correction は発言に対する文法的な訂正や誤りの指摘、Repetition は発言に対する一部あるいは全部の繰り返し、Paraphrase は発言の改訂・改善、Comment は発言に対する肯定的あるいは否定的な応答、Expansion は発言内容の拡張あるいは関連

する情報の付加、Clarification request は発言に対する理解不足を解消するための反復や拡張の要求、Elaboration request は発言の内容に対する追加情報の要求である。

7) Discourse initiation (談話主導)

学習者が自発的に開始する発話の頻度を測るための、学習者の発言に対するコード化のカテゴリーである。

8) Form restriction (形式制限)

学習者が発話する上で課される言語形式の制限の程度を明らかにするための、学習者の発言に対するコード化のカテゴリーである。Choral work (一斉作業)、Restricted (制限形式)、Unrestricted (非制限形式) に区分される。Choral work はモデル発話に続いてクラス全体で繰り返すといった、発話形式が完全に制限される場合で、Restricted は教師やテキストなどにより個々の学習者の発話形式に制限が要求される場合、Unrestricted は教師やテキストなどによる制限が無く学習者が自由な形式で発話する場合である。

3.2 コーディングの実例

付録に示すコーディングの対象となったのは、A大学の英語・英文学を専攻する学科の1年生向けに開講された英語基礎訓練プログラムの外国人教師による授業の一部で、「女性のステレオタイプ」に関する内容のテキストを用いて学生とやり取りしている場面である。以下に付録の①～③の発話部分のコーディングの方法を示す。

①の発話は、内容に関し教師が新たに質問している場面である。“What’s the example of…?”という質問は、学生の応答を予め予想できない質問で、長さも節が3以上なので、L2, Genuine request, Sustained にチェックを入れる。

②の発話は、学生が①の教師の質問を受けて、“sensitive”と短く応答している場面である。学生はこの場合、語で答えるか文で答えるかなどの形式に対する制限を教師から課されていない。また、①の質問に対する応答は、質問者である教師によって想定できないものである。よって、L2, Unpredictable, Ultraminimal, Unrestricted にチェックを入れる。

③の発話は、学生が教師の指示に従い、教師が想定している形式(should)を使って文で発話しようとして言いよんだところである。Predictable, Restricted にチェックを入れる。

以上の例から分かるように、コーディングを行う過程では、発話の意図を正確に読み取らなくてはならず、授業の録音音声のみならず、録画ビデオなども繰り返し視聴するといった繊細で慎重な作業が求められる。

4. 集計方法

4.1 COLT Part B の集計

ターンを基礎的な単位として、教師と学生の発話を3.1で説明したカテゴリー内のそれぞれの項目に区分する。項目の区分に変化が見られたときにチェックがつけられるが、カテゴリー内の分布はそこにある項目の比率で算出される。以下、前節で述べたA大学の授業の一部のコーディング（表1）を用いて、計算方法を示す。

最初に、Sustained speech を例にとれば、カテゴリー内の項目について、Minimal には3つ、Sustained には2つのチェックが入っている。全体のチェック数5との比率で算出すると、それぞれの項目は Minimal が60%、Sustained が40%となる。

Incorporation of student/teacher utterances については、Form と Message に区分して Reaction to form/message の項目 (form/message) にも同時にチェックを入れる。表を例にとれば、学生の発話内容の意味に対して、教師がただそれに応答しコメントする場合、つまり表の教師の発話 “She does. So is your house the traditional household.” については、Message, Comment にチェックが入る(表1 項目番号①)。一方、学生の発話内容に対して、教

表1 Analysis and Synthesis of Teacher Verbal Interaction

TRANSCRIPTS				TEACHER VERBAL INTERACTION																	
				Target language			Information gap		Sustained speech		Reaction to form/		Incorporation of student utterances								
				Off task	L1	L2	Giving Info.		Request. Info.		Minimal	Sustained	Form	message	Correction	Repetition	Paraphrase	Comment	Expansion	Clarif. request	Elab. request
							Predict.	Unpred.	Pseudo requ.	Genuine requ.											
①	T: She does. So is your house the traditional household.					✓					✓		✓				✓				
②	T: Is your house traditional household? Do you think?					✓						✓								✓	
③	S: My mother making...																				
④	T: My mother sorry?					✓				✓			✓						✓		
⑤	S: Makes dinner.																				
⑥	T: Makes dinner.					✓				✓			✓		✓		✓				
⑦	T: But she also works?					✓				✓			✓							✓	
⑧	S: My father don't have don't strong.																				
⑨	T: He isn't strong.					✓				✓		✓		✓		✓					
⑩	S: He don't have power.																				
⑪	T: He doesn't have power.					✓					✓	✓		✓		✓					

表2 Calculating Part B feature in Combination

Form-related incorporations	29%
Correction + Paraphrase	2/7=0.29=29%
Message-related incorporations	71%
Comment	1/7=0.14=14%
Repetition + Comment	1/7=0.14=14%
Clarification request	1/7=0.14=14%
Elaboration request	2/7=0.29=29%

師がその発話を繰り返しつつコメントを加える場合、例えば表の学生の発話 “Makes dinner.” に対して教師が “Makes dinner.” と応答する場合は、Message, Repetition, Comment の3項目にチェックが入る（表1 項目番号⑥）。また、学生の “My mother making…” に対して教師が “My mother sorry?” と聞き返すような場合、つまり、学生の発話の内容が不明瞭で、教師がその意味の明確化を求める場合には、Message, Clarification request となる（表1 項目番号④）。また、学生の発話内容に対して、更に追加情報を求める質問が学生に対して行われた場合、つまり表中の教師の発話 “Is your house traditional household? Do you think?” や “But she also works?” は Message と Elaboration request の項目にそれぞれにチェックが入り、Message, Elaboration request それぞれにダブルチェックが入る（表1 項目番号②⑦）。以上が Message に関わる教師の取り込みのコーディング例である。

次に、Form に関わる教師の取り込みの例を同様に表を用いて示す。学生の “My father don’t have don’t strong.” という発話に対して、教師が “He isn’t strong.” と応答するような場合、つまり、学生の発話の言語形式について訂正をしつつ言い換える場合には Form, Correction, Paraphrase にチェックが入る（表1 項目番号⑨）。学生の発話 “He don’t have power.” に対する教師の応答 “He doesn’t have power.” も同様に Form, Correction, Paraphrase となる（表1 項目番号⑪）。以下は、以上例としてあげた教師の取り込みに対する比率の計算方法である。

表2は、表1の教師による取り込み（計7回）を Form/Message 別に、項目ごとに集計したものである。言語形式に関わるものが29%であるのに対し、メッセージに関わるものは71%であることを示している。教師の学習者への発話への応答が文法・語彙・発音など言語形式に対してなされているのか、或いは発言の意味・内容に対してなされているのか、またそれぞれの応答の中身を分析しその割合をみることで、教室内での言語活動に関わる学習環境についての調査が可能となる。

4.2 Sequential Analysis の集計

Colt Part B では、教師と学習者、また学習者間における発話のやりとりがそれぞれ機能に

よってコーディングされ、集計されるが、発話がどのように展開し、構築されているのかを明らかにすることができない。青木・他(投稿準備中)では、その点を補うために逐次分析(Sequential Analysis)に基づいて集計する方法を導入した。会話の展開の仕方を次の7つに分類して、それぞれの頻度を集計した。教室会話は、教師が質問などによって主導し(Initiation)、それに対して学生が応答し(Response)、それに対して教師がコメントなどを加えて(Follow-up)展開していくことが多い(Sinclair & Coulthard, 1975)。しかし、課題の指示(Instruction)のように教師の説明のみで終わるもの(Initiation alone)や、学生の応答で終わる場合(IR)など、会話の発展があまり見られないパターンもある。会話がIRF以上に展開するのは、さらに追加情報を求めたり、意味の明確化を求める場合や会話の内容を発展させていく場合などで、IRFの後にElaboration requestやClarification request、或いはExpansionなどが続く場合である。それ以上に発話が続く場合は、IRF + Elaboration request + Clarification request等として展開の仕方を示して集計した。以下7つの分類を(a)(b)(c)の3パターンに分けて示す。

(a) IRF まで展開しないパターン

- 1) Instruction (Unpredictable information のみ)
- 2) Initiation alone (Request information のみ)
- 3) IR (Request information と Giving information のみで Incorporation のないもの)

(b) IRF のみで完結するパターン

- 4) IRF alone (Request information, Giving information, and Incorporation)

(c) IRF からさらに展開しているパターン

- 5) IRF + Elaboration request
- 6) IRF + Clarification request
- 7) IRF + Expansion

表1は、教師による追加情報を求める問いかけ“Is your house traditional household? Do you think?”(Elaboration request)に対する学生の応答“My mother making…”に対して教師は“My mother sorry?”と意味の明確化を求め(Clarification request)、学生の応答を受けて、さらに“But she also works?”と追加情報を要求し(Elaboration request)することで、学生の発話を促している。IRF + Clarification request + Elaboration requestの例である(表1項目番号②～⑦の流れ)。またやりとりは学生の発話の文法的誤りに対する教師の言い換え、“He isn’t strong.”や“He doesn’t have power.”と続き、訂正(Correction)と言い換え(Paraphrase)のフィードバックを行っている(表1項目番号⑨～⑪)。教師が学生の発話を引き出しコミュニケーションなやりとりが展開されている例である。

5. 問題点

実際に教室での言語使用を観察してみると、COLT Part B にはいくつかの問題点があることがわかる。ここでは、その問題点を、コーディング、集計、評価に分けて記す。

5.1 コーディング上の問題点

Pesudo requestは、話し手はその情報を知っているが、聞き手が言語形式などを間違えずに正しく言えるかを確かめるためになされる質問(情報の要求)である。一方、Genuine requestは、話し手がその情報を知らず、それを知りたいがために尋ねる質問である。しかしながら、その境界は必ずしも明確とは言えず、研究の目的やクラスの実態によって変化することも多い。青木・他(投稿準備中)では、本文中にある語彙の意味を問うものは、Genuine requestとした¹。これは、リーディング教材を用いた授業であるということを考慮した結果であったが、実際の授業を観察すると機械的なやりとりも多く、Genuine request であるか判断し難い面も否めなかった。

COLT Part B は、主として、言語機能によって発話を分類している。しかしながら、形式に着目した分類を残している部分もある。その代表例が、Repetition である。この項目は、直前の発話の繰り返しを指し、それ自体の機能(例えば、強調)はCOLT Part B の定義の中では明示されていない。また、項目として2つ用意されているのだが、機能が重なっているものがあり、コーディングを難しくしている。その一つが、Correction と Paraphrase であり、後者は訂正を意図して使われることがあり、Spada & Frölich (1995, p.78) 自らもその問題点を指摘している。

言語機能というよりも、その発話がどのように理解されるかによってだけ分類されている項目もある。そのため、1つの項目が Sequential Analysis では、全く異なった分類になることがある。その代表例が、Unpredictable information であり、その発話の意味が予測不可能と理解される場合に用いられる。この項目は、Genuine request の応答としても用いられる。また、教師の指示や説明に対しても、学習者にとっては予測不可能な情報であるとして用いられることがある。指示と応答は、会話の流れでは全く異なる部分を構成するが、COLT Part B では、それに対して1つの項目しか用意していないのである。

1つのカテゴリーには、それに必要な項目が全て用意されているわけではなく、あいまいさを残しながら他の項目で代用することがある。例えば、Incorporation of student utterances というカテゴリーには、Confirmation という項目がない。青木・他(投稿準備中)では、場合によって Comment や Clarification request などに分類した。

5.2 集計上の問題点

COLT Part B は、Sequential Analysis を意識し、情報のギャップを引き金にした発話の展

開を前提にしている。Spada & Fröhlich (1995) は、明確には述べていないが、3 ターンを基本として、次の2つの流れを考えて作成したと思われる。

- 1 Pseudo request → Predictable information → (Reaction to form) Incorporation of student/teacher utterances
- 2 Genuine request → Unpredictable information → (Reaction to message) Incorporation of student/teacher utterances

しかしながら、Pseudo request に学生が間違えて答えた場合は Unpredictable information とコーディングされ、必ずしも上記の1のような流れになるとは限らない。このように多様な流れがあるにもかかわらず、Pseudo request と Unpredictable information は別々に集計されるため、後者が Genuine request の応答であるのか Pseudo request の応答であるのかわからないようになっている。

また、COLT Part B で想定されている情報のやりとりは、3 ターンまでなので、集計結果を見る限りでは、それを超えたものを追跡することが難しいという問題がある。

問題を整理するために、追跡可能な場合を先に挙げる。表3と表4は、同一クラスを分析・集計の対象としている。

表3で示されるように、教師の Pseudo request は1回、Genuine request は33回である。それに対して、学生の Predictable information は1回、Unpredictable information は32回である(表4)。この集計では、Pseudo request → Predictable information, Genuine request →

表3 Descriptive Statistics of Teacher Verbal Interaction: Off task, Target language and Information gap

Off task	Target language		Information gap			
			Giving info.		Request info.	
	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
0	0(0.0%)	97(100.0%)	0(0.0%)	16(100.0%)	1(3.0%)	33(97.0%)

表4 Descriptive Statistics of Student Verbal Interaction: Discourse initiation, Target language and Information gap

Discourse Initiation	Target language		Information gap			
			Giving info.		Request info.	
	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
1	3(7.3%)	38(92.7%)	1(3.0%)	32(97.0%)	0(0.0%)	1(100.0%)

表5 Descriptive Statistics of Teacher Verbal Interaction: Off task, Target language and Information gap

Off task	Target language		Information gap			
			Giving info.		Request info.	
	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
0	0(0.0%)	94(100.0%)	0(0.0%)	23(100.0%)	0(0.0%)	19(100.0%)

表6 Descriptive Statistics of Student Verbal Interaction: Discourse initiation, Target language and Information gap

Discourse Initiation	Target language		Information gap			
			Giving info.		Request info.	
	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
1	3(5.8%)	49(94.2%)	0(0.0%)	40(100.0%)	0(0.0%)	2(100.0%)

Unpredictable information という流れがかなりわかりやすく読み取れる。

表5と表6は、別の同一クラスを分析・集計の対象としている。このクラスの場合は、前のクラスのようなわかりやすい流れにはなっていない。表5で示されるように、教師の Pseudo request は0回、Genuine request は19回である。それに対して、学生 Predictable information は0回、Unpredictable information は40回である(表6)。この集計では、Pedudo request もなく、それに対する応答である Predictable information もないというのはすぐには読み取ることができる。しかし、Genuine request と Unpredictable information のつながりは理解しにくい。Genuine request の応答としての Unpredictable information は19回あったにしても、残りの21回の Unpredictable information がどのようにしてなされたかについては、この集計からだけでは把握することはできない。

詳細に調べてみると、Incorporation of student utterances に Clarification request, Elaboration request や Expansion を含むターンが21回あり(表7参照)、その応答としての Unpredictable information である可能性が高いことがわかる。このようにして、集計の仕方が3ターンまでのため、それ以降の流れを把握するためには、複数の表を詳細に見て考察することが必要になる。

表7 Descriptive Statistics of Verbal Interaction:
Incorporation of Student/Teacher Utterances

Form-related incorporations	6(11.3%)
Correction + Repetition	2(3.8%)
Comment	1(1.9%)
Repetition + Comment	2(3.8%)
Clarification request	1(1.9%)
Message-related incorporations	47(88.7%)
Repetition + Comment	16(29.6%)
Repetition + Clarification request	2(3.8%)
Comment	12(22.2%)
Clarification request	8(14.7%)
Expansion	4(7.4%)
Elaboration request	6(11.0%)

5.3 評価の問題点

COLT では、コーディングと集計の方法は明記されているが、それをどのように評価するかという点については触れられていない。例を挙げて説明すると、「Genuine request が Pseudo request に比べて多い」という集計結果があったとしても、それが何を意味するのか、どのように評価したらいいのかが明示されていないのである。これは、COLT が観察法のみを記述したものであり、それを超えるものは他の研究から補って行かなければいけないからである。

6. 終わりに

本論では、COLT (Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme) Part B の観察カテゴリーとコーディングおよび集計の方法を概観した。また、コーディングや集計方法の問題点についても論じた。共通の授業観察方法により授業を観察し分析することは、教育効果の測定のために重要である。COLT は広く用いられている授業観察法であり、これを用いた研究が報告されてきているが、Part B は、集計の労力やカテゴリーやコーディングおよび集計方法の理解に困難が伴うため、Part A に比較して使用例が少ない。しかし、Part B は、その使用により授業全体のコミュニケーションへの指向性についてより詳しい授業の特徴を明らかにすることが可能であり、授業分析を行なう上で有効である。本論が、授業分析研究や教育効果研究の発展に寄与することを願っている。

注

- 1 Spada & Fröhlich (1995) では、そのコーディング例から考えると、Pseudo request に分類される可能性が高い。

参考文献

- 青木千加子・石塚博規・横山吉樹・酒井優子・河合靖（投稿準備中）。「COLT Part B によるコミュニケーションを指向した英語プログラムの授業分析：Communicative Class room Research Using COLT Part B」, *Research Bulletin of English Teaching*, 5.
- 浅岡高子(2003)。「オーストラリアの中学校の日本語の授業を分析する：COLT Scheme を使って」, 宮崎里司・ヘレン＝マリOTT(編)『接触場面と日本語教育－ネウストブニーのインパクト－』明治書院, pp.305-317.
- 石塚博規・横山吉樹・平田洋子・青木千加子・伊東優子・河合靖・高井收・新井良夫（2005）「COLT Part A によるコミュニケーションを指向した英語プログラムの授業分析」, 『JACET 北海道支部紀要』第2号, 41-63.
- 加藤幸次（1977）.『授業のパターン分析』明治図書.
- 藤森和子（1990）.「Discourse Analysis と COLT Scheme による授業分析」, 『JACET 全国大会要綱』第29号, pp.18-19, 大学英語教育学会.
- 安野浩子・堀田誠・浜中直宏・酒井英樹（2004）「COLT Observation Scheme (Part A) による小学校英語活動の授業分析」, 『小学校英語教育教育学会紀要』第4号, 47-53.
- Allwright, D. & Bailey K. M. (1991). *Focus on the language classroom: An introduction to classroom research for language teachers*, Cambridge University Press.
- Evans, C. (2001). Characteristics of teacher speech by native English teachers and Japanese English teachers, and their students' interactional strategies. Unpublished master thesis, Portland State University.
- Spada, N. (1987). Relationships between instructional differences and learning outcomes: A process-product study of communicative language teaching. *Applied Linguistics*, 8, 137-161.
- Spada, N. & Fröhlich, M. (1995). *COLT observation scheme*, Sydney: National Centre for English Language Teaching and Research (NCELTR).
- Gaynor, R., Dunn, L., & Terdal, M. (1997). Evaluating the COLT scheme as a classroom observation instrument. 『東海大学紀要外国語センター』第18号, 1-9.
- Taguchi, N. (2005). Japanese teacher's perceptions and practice of the communicative approach. *The Language Teacher*, 29, 3-12.
- Terdal, M., Dunn, L., & Gaynor, R. (1997) Communicative English language teaching in Japanese universities: Teacher adaptations. *The ORTESOL Journal*, 18, 1-26.
- Yu, M. (2006). On the teaching and learning of L2 sociolinguistic competence in classroom settings, *Asian EFT Journal*, 8 (2), 111-131.

付録

COLT PART B: COMMUNICATIVE FEATURES

Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme

School _____ Date of visit December 9th, 2003

Teacher _____ Subject _____ Oral English I _____ Coders Yokoyama/Ishizuka

TRANSCRIPTS			TEACHER VERBAL INTERACTION												STUDENT VERBAL INTERACTION																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
	Off task	L1	L2	Information gap			Sustained speech	Reaction to form/ message	Incorporation of student utterances						Target language	Information gap			Sustained speech			Form restriction			Reaction to form/ message			Incorporation of student/teacher utterances																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
				Giving Info.	Unpredictable	Request. Info.			Minimal	Sustained	Form	Message	Correction	Repetition		Paraphrase	Comment	Expansion	Clarification request	Elaboration request	Discourse initiation	Predictable	Unpredictable	Pseudo request	Request. Info.	Ultra-Minimal	Minimal	Sustained	Choral	Restricted	Unrestricted	Form	Message	Correction	Repetition	Paraphrase	Comment	Expansion	Clarification request	Elaboration request																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
①	Yeah. Passive. So, should not be aggressive. They should conform. For example, how? What's the example of how they should conform? Miss Ikeda. What's one example in the second paragraph?	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													</

《SUMMARY》

Issues in Observing Language Classes Using COLT Part B

Yasushi KAWAI, Yuko SAKAI, Yoshiki YOKOYAMA,
Hiroki ISHIZUKA, Chikako AOKI

The purpose of this methodological paper is to give guidance for the use of COLT (Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme) and discuss issues and probable solutions in implementing this method. The standardization of the class observation system is essential to describe, compare, and analyze language classes. COLT is a tool for the in-class interaction analysis that was developed by Spada & Fröhlich (1995) to measure communication-orientation in language teaching. It is widely used in academic research for interaction process analysis, pre- and in-service teacher education, as well as action research for reflective teaching. COLT consists of Part A and Part B. The authors previously introduced Part A (Ishizuka, et al., 2005); thus, this paper focuses on Part B. Recently in Japan, class observation research using COLT has increased; however, the majority of research utilizes Part A. Part B requires labor intensity in coding and calculation. The coding procedure is also complicated. Part B though provides more precise information regarding class communication-orientation than Part A does. This paper, first, briefly discusses the development of class observation tools and reviews studies using COLT. Then, observation categories and coding system are explained with examples from the authors' recent study. Lastly, issues in coding and calculation procedures are discussed. This paper hopefully benefits researchers and practitioners in improving second language education.